



遠く宿縁を慶べ

第3代校長 檜本玉男

人様との出会いというもの程不思議なものはない。何か見えない力に導かれているように思えてならない。私は人様との出会いによって救われ今日を迎えてきた。千種での4年余りの生活を振り返ったとき、その例に漏れることはない。

雪深い正月4日、私は千種高校へ赴任した。私の千種での人々との出会いが始まるのであるが、それ以前に千種の人との出会いが既にあった。現校長の上山先生、三土中校長だった猶原先生である。これらの先生との出会いは可なり古い。私が指導主事の頃、菅野中学校を訪問した時のことである。この出会いは、単なる私の人生における一瞬の出会いに終わらなかった。上山先生とは県教委事務局で、又猶原先生とは三土中学校長に赴任されたことを機に奇しくもそれぞれ再会することになる。

こうした縁がまた因となり、小原町長、烏羽元育友会会長、今は亡き春名俊秀先生など、上山先生とゆかりの深い、私にとっては得がたい協力者との出会いが得られたことを考える時、これを単なる偶然ということでは片付けることは、私にはとても出来ない。

千種高校定員割れという悩ましい現実に関し、高校の存亡が巷にささやかれるようになったとき、勿論、それは本当に多くの協力を得た。それらの人々をここに枚挙するいとまはないが、就中、小原町長、歴代育友会会長、猶原先生、春名先生との出会いがどれ程私を不安から解放し

てくれたことか。

小原町長は、しばしば徹しい姿勢で高校にむち打たれた。千種高校を憂える心情は、決して町長としての立場上のタテマエではなく、ホンネだったからにちがいない。

猶原校長は、三土中学校に転動されるや「千種高校をなくしては、町の灯が消える。」と郡中の中学校に訴え、高校が危機を脱することへの強力な推進力になってくださった。

在籍数の減少はいたし方がない。しかし、その少ない生徒を引きつける魅力をと、教職員の苦心は人知れぬものがあつた。春名先生が夭折された遠因を探ればここにあつたにちがいない。総て努力は無駄にはならない。

或る時、神戸元町駅前いた。突然私は呼ばれ振り返ると、千種高校の卒業生だった。一緒にいた同僚は「羨ましいなあ。私なんか卒業生に呼びとめられたことがない。知っていても知らん顔をされている。」と苦笑なされた。学力とはなにか。教育の目的は「人間らしさ」「人間の尊厳」の心情を養うことに尽きる。千種の子にはこれが育っていた。

親鸞は「遠く宿縁を慶べ。」と説いた。人との出会いも遠い宿縁にちがいない。それが自分にとって支えとなる出会いなら、成長のこの上もない糧となる。それが当面自分に返る出会いであったとしても、自らを練り磨く出会いである筈である。尚更に大切にしたい。